⠼⠦　８ひき　　８さい
⠼⠴　９まい　　９がつ
⠼⠲⠄　10さつ　　10こ

【特殊音】

「よく使われる特殊音」として平成３年内閣告示『外来語の表記』及び『日本点字表記法』に掲載されている「国語化の程度の高い語」13 種を次に掲げる。

ここまで学習を進めてきた児童にとっては、普段よく使う「ティッシュ」や「ファイル」等はすらすらと読める場合も多い。具体例とともに指導するが、児童にとってなじみのない語例も少なくない。児童それぞれの実態に合わせて、活用されたい。

よく使われる特殊音　13 種

⠈⠣　シェイク　ポシェット
⠈⠣　チェンジ　チェリー
⠈⠣　ビルディング
⠈⠣　コンツェルン
⠈⠣　ファイト　ファイル
⠈⠣　パーフェクト　フェンス
⠈⠣　デュエット　フォンデュ
⠈⠣　ジェットキ
⠈⠣　ティッシュ　パーティー
⠈⠣　モーツァルト
⠈⠣　カンツォーネ
⠈⠣　フィールド　トロフィー
⠈⠣　フォーク

第５節　マスあけ（分かち書き・切れ続き）の基礎的な理解

１　触読導入の学習の最終段階にあたって

前に述べたように、漢字仮名交じり文では、漢字が語の区切り目を表すことが多いため分かち書きをしていないが、表音文字である点字では、語の区切り目を明らかにするために分かち書きをする必要がある。

点字の分かち書きは、文節で区切ることが第一の原則である。文節は、発音や意味のうえで不自然にならないように、文をできるだけ短く区切っ

たまとまりと定義される。「ね」や「さ」などの助詞を差し込んで区切れるかどうかを判断できる。サ変動詞などの例外を除けば、点字は原則的に文節の切れ目でマスあけをしている。なお、国語科の学習で文節という用語を学習するのは中学１年で、点字初学の児童の教科学習にはまだ出ていない。

また、切れ続きは、複合語内部の意味の切れ目を明確にするために行うマスあけのことである。「自立活動」「総合学習」「小学部１年」「〇〇先生」「カレーライス」など、児童の生活の中での使用頻度は大きい。

マスあけは、この分かち書きと切れ続きに分けられる。本節では、児童の理解のしやすさを考え、第２節から使用しているマスあけという用語で学習を進める。もちろん、中途障害の生徒等においては、文節の分かち書き・複合語の切れ続きについて用語を使用して説明することに差し支えはない。

点字の触読導入の最終段階にあたっては、１字１字の弁別ではなく、文節ごとを単位として、意味も理解しながら読めるように指導していくことが大切である。マスあけがあるから読みやすいということを、読みながら実感できるようにするとよい。

また、１字１字の正確な読みはもちろん大切であるが、それにとらわれ過ぎることなく、「読めた！」という気持ちを大切に、「もっと読みたい」「速く読めるようになりたい」という意欲を喚起できるような言葉かけや支援が必要になる。「もっと読みたい」気持ちになるには、「読めた」という確信が基盤になる。少々の誤読はあってもどんどん読む体験、読みたいと思う文例の提示、周囲の賞賛の言葉かけなど様々な工夫ができよう。また、読む際に、滑らかな両手読みの動きを支援できるように手を添えることも、この段階であっても行ってよい。

２　マスあけの基礎的な理解のための題材例

以下は、点字触読練習のための児童の生活経験に沿った内容の文例である。句点・読点の導入、第１かぎを使用している。最初に与える文例としては、児童の感覚（触覚・聴覚・味覚・嗅覚）を活用させ、視経験がないとわかりづらい内容は避けるべきである。

文を読んでみましょう(1)
ぶんの　くぎりわ　てん（ ⠂ ）
ぶんの　おわりわ　まる（ ⠁ ）

せんせい、　おはよー　ございます。
みなさん、　おはよー　ございます。
おひさま　ぽかぽか、　げんきに　あるく。

ばななが　すき。
かわわ　すべすべ。
まがった　かたち。
かわを　むくと、　いい　におい。
たべると　あまい、　おいしい　ばなな。

文を読んでみましょう(2)
いぬが、　いる。
なまえわ、　なにかな。
さわると、　けわ　ふさふさ。
いぬが、　てを　なめる。
ぺろぺろぺろ。
あったかいね。

かぜが　ふく。
まどを、　がたがた。
どあを、　ぎーぎー。
ほんを　めくって、　にげて　いった。

文を読んでみましょう(3)
はなし　ことばにわ、　かぎ　「・・・」を　つけます。

あさの　あいさつ、　「おはよー」。
ごはんの　まえにわ、　「いただきます」。
ごはんの　あとにわ、　「ごちそーさま」。

でかける　ときにわ、　「いってきます」。
かえった　ときにわ、　「ただいま」。
よるの　あいさつ、　「おやすみなさい」。
ああ、　ねむい。

言葉遊びが好きな児童は多い。以下は教師と一緒に言葉遊びを楽しみながら、点字の表記、基本的な仮名遣い・分かち書きに慣れるための教材である。

マ行など点の数が多い字、拗半濁音など読みにくい字、左右逆転した字（鏡字）、⠷⠷　⠷⠷などの誤読しやすい字を意図的に入れ込んであるが、この時点でそれらを正確に読まなければならないということはない。六つの点の確実な触読によって正確に読むことは大切であるが、読めたという達成感を基盤に、声に出して読みながら音やリズムを楽しめるように工夫した活用を期待する。

声に出して何度も読みましょう
いぬも　あるけば　ぼーに　あたる
はなより　だんご
ちりも　つもれば　やまと　なる
２かいから　めぐすり
わらう　かどにわ　ふく　きたる
えんの　したの　ちからもち
ねこに　こばん

むかし　むかし　ある　ところに、　おじいさんと　おばあさんが　すんで　おりました。　おじいさんわ　やまえ　しばかりに、　おばあさんわ　かわえ　せんたくに　いきました。　ある　ひ、　おばあさんが　せんたくを　して　いると、　むこーの　ほーから　おおきな　ももが、　どんぶらこ、　どんぶらこ、　と　ながれて　きました。

こーちょー　せんせい
しょーがく　１ねんせい

じりつ　かつどー
ぜんこー　しゅーかい
かれー　らいす
おれんじ　じゅーす
けいたい　でんわ
けいさん　どりる

　　声に出して何度も読みましょう
うらにわにわ　２わ、　にわにわ　２わ、　にわとりが　いる。

なまむぎ　なまごめ　なまたまご
あかまきがみ　あおまきがみ　きまきがみ
となりの　きゃくわ　よく　かき　くう　きゃくだ

かえる　ぴょこぴょこ　みぴょこぴょこ
あわせて　ぴょこぴょこ　むぴょこぴょこ

おどろき　ももの　き　さんしょの　き
けっこー　けだらけ　ねこ　はいだらけ
おっと　がってん　しょーちのすけ
なんか　よーか　ここのか　とおか

　　声に出して何度も読みましょう
たこ　たこ　たこ　たこ　わらった　こねこ
いか　いか　いか　いか　いっても　いいかな
かい　かい　かい　かい　てんじで　かいた

まつ　まつ　まつ　まつ　ばすを　まつよ
たけ　たけ　たけ　たけ　あれ　わすれたっけ
うめ　うめ　うめ　うめ　うなどん　うめえ

あわあわ　おふろで　あわだらけ
わくわく　こころが　はずんでる

わいわい　みんなで　でかけよー

てんてん　てんじは、　みんなの　ともだち！

３　触読の学習のための学習環境

墨字で学んでいる児童は、絶えずその視野に墨字が入ってくる。教室にいても通学途上であっても、まわりに文字があふれている。日常的に、意識的にも無意識的にも墨字を目にしているので、そこからも文字を読む学習をしていると考えられる。

しかし、点字使用児童の場合、点字の本やプリント以外には、意識的にも無意識的にも点字を読む機会は少ないと言わざるを得ない。様々な場所等での点字表示は増えてはきたが、積極的に触れに行かなくては触読の機会は限られてしまう。学習の場において、「何か書いてあるな、読んでみよう」と児童自身が積極的に手を出せる機会を増やすよう教室表示などを工夫し、「触ったところに点字がある」というような学習環境を整えてほしい。